

# 羅針盤は自 分の心



**KAI PFROMMER**

Inhaltsverzeichnis

[Impressum](#)

## プロローグ

私にとって、彼がとても幸せであるのを見ると、毎日太陽が昇ります。彼は多くのことをする必要はありませんが、それでも彼は何度も何度も私の顔に笑顔を浮かべます。この鉄道車両が私の義理の息子を魅了しているかのように、彼は午前中ずっとそれで遊んでいました。彼は架空の谷や高山をドライブし、私がこのおもちゃに魅了されるたびに。

私は朝食のテーブルに座って、日曜日の新聞に集中しようとしませんが、それは私にとって非常に難しいことです。一方では、妻がキッチンでパンケーキをハミングしていて、もう一方では、私の義理の息子が大きなソファで彼の鉄道車両で遊んでいます。私は地球上で最も幸せな人であると主張しています。私はかつて父の後に来る可能性が高いと言われていましたが、私は両方のために何でもします。

思慮深く、私は少し目を閉じて、窓の方に顔を向けます。長い冬の後、春を告げる暖かい太陽の光が私の肌に横たわっています。窓が開いていて、色々な鳥の鳴き声が私たちのアパートに侵入しています。私たちの家は村の郊外の谷の一部にあるので、車が村から出て行くたびにそれに気づきます。ほぼ毎週日曜日のスポーツフィールドが直接私たちの近くに位置しているとして、私たちは、あなたのリビングルームでのサッカーの試合の時計を生きることができる午後。そして、家の前の15メートル未満には、幅が約3メートルの小川があり、私はそれと非常に素晴らしい瞬間を関連付けます。

私が1歳くらいのときに両親が別れた。その後、曾祖母が住んでいたおばあちゃんとおじいちゃんの家に一時的に引っ越し、5年前に

また引っ越しました。ある時、愛するおじいちゃんとの素晴らしい「儀式」を振り返ると、笑顔が唇を盗みます。

彼は週末だけでなく、平日も私を家の前の小さな小川に連れて行ってくれました。彼は私が彼と一緒にいきたいかどうか私に尋ねる必要はありませんでした。彼の見解では、私は彼がやっただけで何が実現し、彼はおそらく私の明るいを見て、私は何かを個という好奇心の目が抑止を小川で彼に参加する可能性があります。私たちは、浮気された、と私は彼が私がより良い私の両親の分離に対処することができるように私を応援するために彼ができるすべてをしていたことがわかりました。私はまだとても若かったのですが、何かがおかしいと思っていました。

おじいちゃんと私は小川を歩くたびに石を集めました。そしてそれは風と天候の中で; しかし、私が一番好きだったのは日光の時間でした。太陽の光が流れる水をキラキラと輝かせた時が好きでした。しかし、私はまた、その中の雲と、それらが小川の流れに沿って、または流れに逆らってどのように浮かんでいるかを見るのが好きでした。

十分な数の石とあらゆるサイズの石が一緒になったら、私たちは一緒に小川のほとりに座って、それらを水に投げ入れました。私はまだ水にそれぞれの石のかの音が聞こえとヘラジカ、その大きさに応じて、異なる音があるベンを。

ある日、おじいちゃんがそれを競技会に変えました。彼は、それがヒンベック誰試すことが示唆アメ最スローするように、あるいは誰が最大の噴水を作成することができます。それは私にとって毎回オリンピックのようでした、そして今日、私のおじいちゃんが私を去ったことを確信しているので、私はそれほど失望していませんでした。以来ね、実際には常に平和、強さと親しみやすさのビットを、私を与えることを、このストリームは、私が持っている巨大な

恐怖作る再び私を見ることができませんには今のビットではないと思  
いました。

私は深呼吸をして新聞を折り、義理の息子をもう一度見ます。リ  
ラックスして、私は前かがみになり、胸の前のテーブルで腕を組ん  
だ。私の考えは私のおじいちゃんに戻ってさまよう。彼は大きな情  
熱を持っていました、そしてそれは家の趣味の部屋で彼の鉄道模型  
でした。白ピーク、谷や川と緑の山々 -彼は最も偉大な風景をデザ  
イン-、プラス彼は彼自身の鉄道そのものの一部を建てました。

彼はいつも私は彼がやって見することを私に許させました。絵はゾッ  
アップ彼は彼の趣味にとして捧げられる方法を見ながら、私は小さ  
な子供のように、巨大な目で私のおじいちゃんを愛して私の頭の中  
で何を彼はそれを扱う情熱と献身。彼がかなり小さな部分に取り組  
んでいたとき、時々狭くなった目で、私はまだ特定のきらめきを見  
ることができました、そしてそれは当時の私にとって熱意、誇り、  
そしてインスピレーションのきらめきでした。

彼が彼の作品の細部を私に精神的に説明しているのを聞くと、彼の  
声が私の頭に響き渡ります。彼の落ち着いた親しみやすい声は私が  
とても恋しいです。私にとっては、すでにが、私は最終的に彼と一  
緒にこの趣味を共有していることを小さな子供のように非常に迅速  
にクリアしたが早く後ではなく、お勧めします。その場合に列車が  
その艦隊を通じて運転し、すべての時間は、小さな男の子が来たで  
彼と一緒に。そして、私は私の人生でこの光景を決して忘れませ  
ん。

その1台の鉄道車両で私の義理の息子を見るとき、より多くのプラ  
イドが私を克服します。時々私は輝き、想像でドの目は彼の目に私  
の祖父を見て。快適な圧力私の胸のうちにスプレッド、そして私の  
考えは汗場合の、私は彼に鉄道車両を与えたときに、特定の日のた  
めに。

約1年前、妻と義理の息子が一緒に引っ越してきたとき、私は大喜びしました。それは私にとって非常に感情的で、魅惑的で、特別で重要な瞬間でした。最初から、私は私の義理の息子に即座に夢中になりました、と私はすぐに私の心に彼を連れて行きました。したがって、私は彼彼の最初の自分のために構築された電子私は海賊セントで彼の願いに従うのベッド、製を。さらに、彼はその真上にゲームプラットフォームを手に入れました。

私たちが彼の部屋を譲り渡して設計し終えたとき、私たちは屋根裏部屋の船に余分な個の家具をすべて持っていたので、アパートにもっと多くの部屋がありました。私は移動、混沌と助成金が最終的に終わったときに我々は、すべて平等に幸せだったと思うの。

それで私たちは仕事に取り掛かりました。私はそれについて何も考えず、2階の屋根裏部屋に足を踏み入れました。私たちが非常に短い時間で非常に強い絆を築いたので、彼は本当に私と一緒にいたかったのです。これは私にとって最大の幸せの気持ちのひとつであり、継父からの子供の頃からこのようなことを何も知らなかったもので、私は非常に誇りに思いました。緊密な絆を築くことはできませんでしたが、義理の息子とは違って、とても感謝しています。彼はもはや私の義理の息子ではなく、私の息子であり、私はそれについてとても満足しています。

私たちは暗闇の屋根裏部屋に着いたとき、私は彼がここに階段を簡単に待たなければならないというのが私の息子に語った電子私は高いが、私たちに失う重量を彼の母親を手渡し家具の一部にできたまで。それから私の計画は私達が一緒にクローゼットを掃除することでした。

私たちの屋根裏部屋は、おそらくほとんどの屋根裏部屋と同様に、階段に1つのライトしかありません。後ろは真っ暗です。引っ越しの時は冬になりそうだったので、残念ながらとても早く暗くなっていました。

私は後で屋根裏部屋で家具の一部が秒を持っていたとき、私は深く、一度息をとと妻、に見えた非常に赤いメートルの彼の頬が出ヘッドパフ作られ、一部はかなり困難だったと言うことは、私にとって大きな目がとてもダム。私はニヤリとうなずき、息子の方を向いた。私は彼がもうそこにはいないことに驚いて少し怖かった。私はすぐに彼の名前を呼び、携帯電話をポケットから取り出し、懐中電灯のスイッチを入れました。

息を切らして、私はあえぎ、箱の前の最後で彼を見つけました。最初は息子がどこにいるのか信じられませんでした。鳥肌が立ち、震えました。彼は私のおじいちゃんが自分で作った電車や飛行機をすべて収納した箱の前に立っていました。魅力的なの彼は部品を見て、彼の目に輝きが、私は決して忘れないだろう、それは私の人生で最高の瞬間の一つでした。私はひざが弱くなり、転倒しないように彼の隣にしゃがみ込まなければなりませんでした。

私の意見では決して終わらないこの非常に魔法の瞬間は、私のおじいちゃんとの素晴らしい時間を完全に思い出させました。その時の写真が何度も何度も私に追いついた。趣味の部屋でもう一度彼と一緒にいるのを見て、彼のコレクションに感心したことに驚きました。

驚いたことに、息子を箱から出すことはほとんどできませんでした。何度も何度も彼は私に新しいパーツを示したとしたゲストの解説、彼の声の高と好奇心。しかし、妻が1階下で焦り始めたとき、私たちは妥協し、私は彼にその1台の小さな鉄道車両を階下に連れて行くことを許可しました。

それ以来、私たちは毎週屋根裏部屋に行き、私たち自身の鉄道の世界に驚嘆しています。私たちが階段を上るとすぐに、彼の指は屋根裏部屋のハッチを指さし、彼の目は大きくなり、その輝きを得る。そして、これらの小さな瞬間は、いつも私の中でおじいちゃんの思い出を目覚めさせます。どこにいても、動物園でも、息子が熱狂に

満ちたホッキョクグマの円盤の前に立っているとき。または、散歩に行くとき、「お母さん、お父さん、見て、飛行機」という言葉で喜んで空を指さします。

時々私の最愛のおじいちゃんのこれらのレビューは大いに傷つきます。私は心から彼を恋しく思っており、今日まで私は彼の死を本当に乗り越えていないと主張するでしょう。誰かがいなくて、二度と会えないことを理解することは、あなたが知っている誰かが二度と見られないこととは非常に異なる感覚です。

私はそれを空虚感として説明します。しかし、あなたの心の奥にある声は、あなたがそれらを再び見るとき、あなたはいつでもこの隙間を埋めることができると言います。そして、これが私の父から離れて約1年後に母が別の男性に会い、私たちが彼と一緒に引っ越したときの私が感じた方法です。その時、おばあちゃんとおじいちゃんを離れて、母のそばにいる新しい男に慣れるのは簡単ではありませんでした。

私にとって幸いなことに、その男は同じ場所に住んでいました。それで、私は毎週末、祖父母を訪ねて一緒に過ごすことを許されました。おじいちゃんとき私は非常に具体的で特別な週末の訪問を覚えているのメートル近い近くの鉄道駅は運転と我々はそこに本物の蒸気機関車にのこぎり秒。

素晴らしく、晴れて暖かい日でした。この巨大な機関車を初めて見たときの気持ちを今でも正確に説明することができます。祖父の小さなモデルと比較することはできませんでした。

私の心は私の胸の中でレースをして、そして私は、私は最初に何も言うことができなかったことを励起し、励起されたが、驚いた、多分私の口が開いていました。蒸気はその後、私のおじいちゃんが大声と心から笑った、機関車の煙突から出て撮影したとき、私は簡単にひるむ、そして私が参加しました。

今日でも、私たちが家族で旅行していて蒸気機関車を見るとき、それは私に非常に特定の記憶のポイントを引き起こします。特に息子がそばにいと、おじいさんがお父さんの役を演じているような気がします。

その間、息子と妻は私と一緒に朝食のテーブルに座ってパンケーキを楽しんでいます。二人は毎週日曜日の朝にそれを扱います。私の息子は私の向かいの鉄道車両のプレートの隣に座っています。彼が先週の小さな事故で作った彼の寺院の小さな隆起に気づき、彼が答えるとき、私は彼に愛情を込めて微笑む。

再び私の心はさまよい、そして私は私の母と私の祖父の本当の恐怖をどのようにひどくしたかを覚えています。母はある朝、仕事をしていました。彼女は看護師として訓練を受けていました。そして、彼が亡くなっている間、私はその日、祖母と一緒に家にいました。もちろん、子供の頃、私は彼女にかなり挑戦し、忙しくしていました。

おむつ交換台を着替えていると、頭の上のおむつ交換台から落ちて、すぐにバンプが現れました。今日、私は悲鳴を上げたかどうかはもう言えません。最大でアラ明トンは遠くありませんでしたヘルプへのおばあちゃんおじいちゃんを得ました。彼は躊躇せずに私を医者連れて行った。ありがたいことに、彼はバンプを除いて、すぐにすべてをクリアしました、私は他の怪我をしていませんでした。

この経験を通じて、あまりにも、私はより多くの私のおじいちゃんに添付になった、と彼との結合が強く、強くなりました。私にとって、彼は長い間私の父でしたが、私の実の父は時々、たとえば誕生日にそこにいましたが、私は本当にもう彼と連絡をとることができませんでした。私のおじいちゃんはいつも私のためにそこにいました、去ってください、そして私はいつも彼の上にいることができました。

人生を変えたある日、祖母から電話がかかってきたとき、突然母が電話をかけてきました。祖母と一緒にいる母が、彼女の表情と彼女の細い声で私が何かがおかしいことに気づいたときでさえ、電話をかけました。彼女が電話を切ったとき、私は彼女が非常に動揺していることに気づきましたが、彼女はそれを見せないように努めました。何も言わずにすぐに立ち去り、当時の彼氏と一緒に私を置き去りにした。

私は幼いのに、何かひどいことが起こったことをすぐに知りました。私の母の友人は自分自身をそらすしようとした、と私たちは、夜になるまでプレーしました。ある時点で、私の母も帰宅しました。彼女は青白く、疲れていて、落胆しているように見えました、そして私は彼女が泣いていることを彼女の腫れぼったい目で知ることができました。交感神経笑顔で、彼女は、私のそばに座って彼の腕の中で私を取り、私の祖父は、天使となりましたことを私に言って、彼は私を見守っていること電子。彼は自転車で旅していたことだったと持っていた個の心臓発作で苦しみました。

このように、私はより多くのはおじいちゃんを見ることはないだろうことに気づきを推薦します。私にとって、世界は崩壊しました。今、私は父とても素晴らしいの役割を想定しているより多くの本当の父親と祖父がない、ありませんでしたを。彼は私たちの家族の男性であり、私にとって、私のロールモデルであり、私の堅実な岩でした。

私は子供の頃に彼についてたくさん尋ねました、そしてその鈍くて持続的な痛みは今日まで私を悩ませます。あなたの人生の他、もはや部分に1秒からである最愛の人失うこと、である、あなたは誰の心生きていると同じように涙。しかし、私を助け、ある程度の痛みに対処するのに役立つのは、私の祖父の思い出です。

## 第1章

長い間、母と私は継父と一緒に父の家に住んでいました。今私の祖父母の家で2015私ライブバックするので、メモリは常に返されま  
す特徴に私のおじいちゃん目覚めました。時々私は彼が私にとても  
近いと感じることさえあります。最初はこの感覚が少し怖かったの  
ですが、近くにいる彼のことを考えると、今では唇に笑顔が忍び  
寄っています。

それが今の私も笑顔です。私たちの朝食はもう終わりました、そし  
て私は少し過去を思い出し続けるために少しの間庭に後退しまし  
た。私はラウンジャーでリラックスし、暖かい太陽の光に甘やかさ  
れました。

私の愛する曾祖母は、残念ながらその間に亡くなりました。その  
後、我々は、私のおばあちゃんのことにも同意した理由は、一階に彼  
女の年齢を描いている間、私は妻と息子二階で今の私生息。すでに  
述べたように、私たちの家は谷にあり、そこからそう遠くないと  
ころに小川があります。1999年まで、小川は私たちの家に少し近  
かった。

しかし、私たちの場所全体が水没した大洪水によって、小川が流れ  
ていて、変化したので、私たちは将来そのようなひどい出来事を再  
び経験する必要はありません。1999年は私にとって波乱万丈の年  
でした。多くのことが起こった、良い、それほど良くない、そして  
私は恐ろしい、私が今年より記憶に残ることを特徴づけた。

1999年の数字をどこかで見たとき、まず妹のことを考えなければ  
なりません。私たちには同じ父親がいませんが、私にとって彼女は  
いつも私の本当の妹です。彼女は私の人生を通して重要な役割を果  
たしてきました。彼女はいつも私をサポートしてくれ、常に正しい  
アドバイスをしてくれます。問題が発生したときはいつでもどこ

でも彼女に頼ることができます。そしてその逆に、私は決して彼女をがっかりさせませんでした。

彼女はその年に生まれました、そして私はその時が私にとってどれほどエキサイティングであったか、そして私が私の妹をどのように楽しみにしていたかを今でも正確に覚えています。彼女はまだ生まれていませんでした。私はすでに彼女を信じられないほど愛していて、ついに彼女に会い、抱きしめ、遊んで、初めて私の腕に抱くことができるのを待ちきれませんでした。

母が妊娠している間、私は毎日お腹に寄り添い、何かを聞こうとしました。小さな生き物が激しく蹴ったり、力が弱くなったり、何も感じられなかったりすることもありました。

私は母にほぼ毎日同じ質問をしました。彼女はいつ来るの？それが最終的にどうなるときは？「妊娠の終わりに向かって、私も日によって大きな一日を取得し、私の母の腹を見ることができた、と私の興奮も増加なので、私はそれは私の妹の前になります長くないかもしれないことに気づいたので、私たちの家族に加わります。

しかし、ある日、質問は終わりました。母は妹を出産するために病院にきました。私は義父を追いかけ、もう待つことができませんでした。私は完全に興奮して震え、義父も私と変わらなかったのでたくさん見ました。

私は非常に若かったし、全体のことをしても、実際に見積もることができませんでした。私は素晴らしいだけで何かが起こる知っていた電子が、そこにね、このねフル下の充実は、私たちの生活です。奇跡は私の妹でした。

見過ごされているような気がしないように、浴槽用の小さなボートを渡されました。このボートは、妹が兄に生まれたとき、ちょっと